玄洋社関係史料の紹介

石瀧　豊美

第27回

福岡表警聞懐旧談（一九）

最後の抵抗を続けた越知彦四郎らも椎木村（現・嘉穂町）で捕縛され、福岡へと移された。五月一日、越知彦四郎、久光忍太郎、加藤堅武（かたむ）、村上彦十の四人に「除族の上斬罪」との死刑判決が出て、その日のうちに執行された。斬罪は士族にはふさわしくないので、士族の籍を奪った上で、斬罪に処したのである。

もう一人、武部小四郎は二日に捕縛されて、三日に判決が出て、やはり死刑となった。刑死はあわせて五名である。

今回はその獄中でのエピソードが紹介されている。

◇　◇

明治丁丑

福岡表警聞懐旧談　下

清漣野生編述

第十四回

○越知彦四郎、久光忍太郎其外一累の所刑

○有志の一人石川新五郎、久留米地方へ派出して、その聯合を策（はか）りたる顛末の追加

茲に越知彦四郎、久光忍太郎の一累は、監獄舎に繋囚せられしこと、殆んど二十日に渉り、その間に於て福岡表出張九州臨時裁判官五等判事小畑美稲、一級判事補香川景福の両掛官より、度々鞫問（きくもん）之下、四月廿四日を以てその口供完結せられしとの聞へありしが、斯くて三十日の夜、即ち午後十一時の頃、檻（監）獄吏入り来り、檻舎の扉を開きて、何か具物（そなえもの）を差入たり。能く之を視れば、監獄掛り医員西川勳蔵、青木謙叔両名の名刺を附して、麦酒一ダス（ダース）、併せて折詰の饌物を添へて、獄裏、犒（ねぎらい）の意を表す。

武部小四郎

越知彦四郎

久光忍太郎

加藤堅武

村上彦十

（いずれも肖像画）

此日や恰も春雨粛々檻窓を撲（う）ち、何となく無限の感情に打れつゝありしが、今や此の差入物を見る。一同に斯くあるべきは、兼て兼て（ママ）覚悟のことにしあれ、毫も騒がず、異口同音「ソラ来た来た」と口□み（注　差入れにより、死刑執行の近いことを覚ったということ）、彼の差入の具物もて充分に快飲に入る。

越知は慫容として同生に向ひて、呵々と打笑ひ、「諸君よ、諸君、大丈夫が末期の魂を見すべし」と呼（叫）び、数瓶の麦酒を仰飲しつゝ、何か高々と朗吟す。此時、久光はその一隅に屏居、何か思案の体なりしが、暫時にして「僕が辞世の吟出来たり、出来たり」と呼びて、声高々と朗詠なしにけり。左に掲ぐ（但し同舎、中野震太郎の記憶を筆記す）。

とふ人も絶へて渚の捨小舟
浮くも沈むも波のまにまに

久光忍太郎
行年二十有五

越知は謂へらく。「僕が辞世吟は断頭場の出放題なり」とて、少しも考案するなく、或は吟詩、或は謡、或は今様、或は都々一、口に任せて放吟せしかば、同座の向もそれに和し、それに続き、浄瑠璃、長歌、手踊なり、各自の技能に任せて蹈舞踊躍せしも、素より獄裏のことにしあれば、之を聞き之を見るものとても一人のあることなきなり。

頓（やが）て天明（てんあけ）、鴉一叫すると共に檻外に声あり。「越知君、越知君」と呼ぶにぞ。

越知はその声に応じて蹶起、「今は是迄なり」とて、一同に握手しつゝ、「僕と久光とはお先に行くべし。各方（おのおのがた）は今脈を断たるゝこと、よもあるまじ。生永らへて、僕等が意の在る所を継続せられよ」との一語を残し、獄吏に召連れられて出獄す。

暫時ありて、又「久光君、久光君」と呼ぶ。久光も亦堂々として騒がず、一同と握手なして出獄す。其他は銘々点呼せられて白洲に出て、徒刑十年乃至七年、五年以下の宣告を受けぬ。

但し村上彦十、加藤堅武等は獄舎を異にせしかば、それの顛末は探知する能はざるも、是亦同様、悲愴惨憺なりしことを知らるべしと、同舎の一人中野震太郎は今日生存して打語れり。

嗟乎々々、越知等の諸士が身を挺して事を挙げ、その対外国権振張の宿図は牴牾背乗し、飽くまで艱険苦楚を凌歴して、遂にその事ならざるのみか、身を殺して止矣（やみ）ぬ。其他の一累は率□徒刑に処（せ）られ、役中にて病歿せしものあり。大約一百名の死歿を見る。吁咽々々何とか謂はん。是れ明治十年五月一日のことなりけり。

加藤堅武の墓（中央＝福岡市博多区・節信院）

此より先き、同志の一人なる石川新五郎は、博多土居町に居住して手職の筆細工を業とし、常に久留米地方へ往復販売なし、同地方へも得意先もあることなれば、挙兵以前に於て、舌間慎吾が差図によりて、久留米士族と聯合して窃に挙兵の事を謀らせしが、同地方の同志者へは、薩の西郷氏が機を見て以て事を挙なば、福岡士族連と聯合して決然挙兵、その声援を為すべきの内約を整はせしも、その要衝田原坂陥落爾後は、その戦気も相鈍れ、各地有志者の議論、稍や変換せんとするにぞ。

石川は尚も同志と謀りてそれの挽回策を営み居たる際、福岡表挙兵の期稍や迫りしことなれば、石川は思ふ仔細の存せしかば、三月二十八日の朝、久留米を出立、晩景に博多土居町の自家に帰り見れば、その日の未明に事は発せられ、福博市街の騒擾は譬ふるに物なく、各商家は悉く戸を鎖し、家内は田舎に立退たり。

（続く）